

黒川温泉の観光まちづくりにおける 協働に関する研究

光永 和可¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学大学院 自然科学教育部土木建築学専攻 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: 183d8362@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

地元住民の為の温泉場が、多くの観光客から支持を得る観光地になるには、様々な組織が共通目的のもと、協力して課題解決を行う「協働」が必要だ。本研究では、熊本県の黒川温泉にて、エピソード記述を用いた調査を行い、観光まちづくりにおける協働を解明することを目的とした。調査から得られた観光まちづくりにおける各時代の活動を、課題解決手法、協働に整理し分析した。研究の成果として、黒川温泉では、6個の課題解決において多様な協働がみられ、時代に順応して変化してゆく協働と、一貫して継続されてきた手法があることが分かった。また、協働の変化の仕方は、組合を中心に、観光地の発展とともに広範囲に進化してきたことが分かった。

Key Words : *collaboration, sightseeing community development, episode description, group dynamics*

1. はじめに

(1) 背景

a) 日本における温泉場の位置づけの変遷

日本において温泉が庶民の間に浸透し出したのは、江戸時代中期頃である。当時、温泉場の主な利用のされ方は、地元住民の湯治や、日々の入浴であったが、近年では、地元住民の日常の一部から、観光客にとっての非日常的な場所へと変化してきている。

熊本県阿蘇郡南小国町にある黒川温泉においても、同様のことが言える。黒川温泉は、九州山地の小さな渓谷に位置していることから、様々な立地的課題を抱えており、昭和50年代半ば頃まで、宿泊客数は伸びなかった。しかし現在では、海外や県外からの観光客も増え、温泉街は客で賑わっている。

b) 温泉観光地における協働の必要性

温泉場は、元来、観光目的で作られた場所でない為、観光地として成熟するまでに、様々な課題が生じる。地元住民の為の温泉場が、多くの観光客から支持を得る観光地になるには、様々な組織が共通の目的のもと協力して課題解決する必要があり、本研究ではこの一連の協力活動を「協働」と定義した。

(2) 既往研究

黒川温泉の発展を研究した論文は、多く存在する。浦¹⁾は、旅館経営に着目し、黒川温泉が多くの観光客から支持を得ている理由に、癒しの演出や、温泉施設の充実等、黒川温泉独自の特徴を挙げている。

また、猪爪²⁾は、年間大勢の観光客が訪れる湯布院の温泉まちづくりを、歴史的な経過を追って整理し、その内発的発展の道筋を明らかにした。

さらに、片岡³⁾らは、長期間に渡り、活動を継続している市民組織に着目し、地域課題に対する協働による取り組みを対象に、各主体の連携内容と役割の把握、活動展開の経緯の解明を行った。

また、杉万⁴⁾は、地域づくりを行う上で、住民、議会、行政の三者が、ときに緊張関係を持ち、刺激し合う関係を維持していく為、行政は住民を直視し、住民は主体的に地域の問題に取り組むべであるとし、地域づくりにおける各主体の役割や、主体間の連携の重要性について述べている。

(3) 目的・新規性

既往研究のように、観光や経営の分野で、黒川温泉の観光地形成を追った研究や、黒川温泉の人気に着目した研究は、既に存在する。また、温泉まちづくりの過程を整理した研究や、地域づくりにおける、複数主体の協働に関する研究も在る。

しかし、観光まちづくりに携わった人々に、エピソード記述を用いたインタビュー調査を行うことで、観光まちづくりにおける協働の変化を明らかにした研究はない。

よって、本研究では、観光地としては条件不利な温泉地が、諸課題を克服してきた手法を明らかにし、現在の温泉観光地に至るまでの、課題解決における協働について分析することを目的とする。

2. 黒川温泉の概要

(1) 黒川温泉の歴史

黒川温泉の発祥は定かではないが、小国郷史⁵⁾では、遠方より訪れた他藩の役人や、上級武士の宿泊施設として、御客屋が利用されたと述べられている。黒川の御客屋は、1752（享保7）年に開業した。当時黒川地域において、宿泊施設は1軒だけだったが、現在では30軒の旅館が営業している。

旅館数が増えた背景の一つとして、黒川温泉の観光カリスマとして有名な後藤哲也⁶⁾は、1936（昭和39）年のやまなみハイウェイ開通という、交通網の発達により、温泉内で、新しい旅館の開発ラッシュが起きたことを述べている。

また、温泉内部の様々な取り組みも背景として挙げられる。その例に、入湯手形がある。入湯手形は、黒川の立地的条件より、露天風呂を作ることができない旅館にも、利益を分配するように作られたシステムで、1986（昭和61）年に導入されてすぐ、観光客数は増加した。このように黒川温泉では、諸課題を協働により解決してきた事例が、多く存在する。

1961（昭和36）年に黒川温泉旅館協同組合（以下、組合と略す）は発足したものの、温泉街内部での具体的な活動は、1985（昭和60）年以降活発化した。平成以降は、温泉街の中心に、組合の事務局である「風の舎（かぜのや）」や、公民館兼観光客の休憩所である「べっちゃん館」ができた。また、黒川温泉のキャッチフレーズである「黒川一旅館」という言葉が定着する等、さらに内部の活動が活発になった。

(2) 立地的課題

黒川温泉は、山奥の渓谷沿いに位置している為、様々な立地的課題を抱えている。本項では、その中から選出した、3つの課題について説明した。図-1に、温泉街内部の地図を載せる。



図-1 黒川温泉街の地図（組合提供）

a) 遠い

黒川温泉は、熊本市内やインターチェンジから訪れる際、公共交通機関での移動手段が少なく、また、自家用車の移動においても、山道の運転が必要な為、時間と体力を要する。熊本インターチェンジ、日田インターチェンジから黒川温泉までの所要時間は、両者とも1時間以上かかる。（組合調べ）

b) 狭い

黒川温泉は、渓谷に位置している為、温泉街は傾

斜に沿う形で立地している。よって、温泉街中心部では、約1kmの限られたスペースに、旅館や土産屋、食事処等、多くの建物がひしめき合っている。そのため、多くの施設が密接しており、その影響で道幅が狭いところが多い。

c) 急である

黒川温泉内部は標高差が大きく、最大で10%前後の勾配をもつ坂が存在する。温泉街内部では、坂道に沿うように土産屋等の建物が立地している。その為、観光客はこの坂を利用するが、体が不自由な方等にとって、急勾配な坂道の移動は困難である。

d) 立地的課題のまとめ

このような立地的課題により、特に、昭和初期以前では、一般家庭に車が普及されていなかったことや、道路が整備が不十分だったこと等から、遠方から山奥の温泉地まで足を運ぶことは困難だったと推測できる。また、温泉街内部でも、b)やc)の立地的課題により、客が入浴に至るまでに、時間や手間を要していたと考えられる。

車が普及し、交通手段も増え、道路が整備された今日でも、これらの問題が物理的に解消されたわけではないが、黒川温泉では、街なみ環境整備事業を始めとした、様々な事業や取り組みが導入されており、立地的課題を、多角度から克服しようとしている動きがみられる。

3. 課題解決の協働に関する調査

(1) インタビュー調査の概要

a) 調査手法

本研究では、インタビュー調査の手法として、エピソード記述を用いた。

鯨岡は、エピソード記述入門⁷⁾の中で、この手法について、「フィールドをただの仮説検証の道具にすることなく、フィールドに頻繁に足を運び、その場の人と素直になじみ、相手を主体として受け止める対人関係の基本姿勢を身につけ、関わり手である自分自身を客観的に見つめる術を身につけ、そして記述の為のいくつかの手順を踏めば、誰にでも接近できる方法論」であると述べており、エピソード記述において、次の3点の重要事項挙げている。

①エピソード背景の提示、②エピソード本体の提示、③エピソード場面に直接に示す意味を越えた「メタ意味」の提示。

この3点の提示をする為には、観察者は対象者の言葉だけでなく、息遣いや、しぐさ等にも目を向ける必要があり、その為には、観察者の主観を完全には排除せず、間主観的な立場で、観察を行うべきだと述べている。そうすることで、エピソードの表面の意味を越えた意味、あるいはその奥の意味である「メタ意味」を捉えることができる。

実際の調査では、この理論に基づき、調査フィールドにおいて、自分自身を客観的に見つめつつも、主観を完全には排除せずに、言葉以外の要素から

「メタ意味」を把握することを心掛けた。

b) 調査対象

対象者は、これまで黒川温泉の観光地形成に携わってきた方々の中から、役職、立場、世代等を勘案し、表-2 の 9 名を抽出した。

表-2 調査対象

日付	場所	対象者	役職
a	12/19	黒川温泉	M氏 元旅館組合長/現黒川温泉自治会長 G氏 元旅館組合長 A氏 元旅館組合長 S氏 元旅館組合長
b	12/20	黒川温泉	I氏 組合事務局長
c	12/21	黒川温泉	K氏 現旅館組合長
d	1/10	熊本市内	U氏 熊本大学名誉教授 I W氏 元熊本県観光課景観整備課長
e	4/11	南小国町	S T氏 現南小国町役場職員

インタビューの手順は、

- ①表-1 の年表をもとにインタビュー用に作った黒川温泉の歴史年表と、表-3 に示した質問項目を渡し、調査の目的を説明し、
- ②筆者らが会話を誘導しないように配慮し、「人生の振り返り曲線」(c)で説明)を作成してもらい、
- ③12/19 は 4 人一緒に、12/20, 4/11 は 1 人ずつ、1/10 は 2 人一緒に、インタビューが質問項目を見ながら自由に「協働」について話す形式をとった。

c) 質問項目

以下の表-3 に質問項目を示す。表-3 の質問をすることで、対象者が「いつ、どのようなことを課題に感じ、その課題を、誰と、どのように協働して乗り越えてきたのか」を明らかにすることができる。

表-3 質問項目

質問項目
1. あなたの人生を振り返って、一本の曲線を書いてください。 3つ以上変化点を書き、何があったのかを書いてください。
2. 上で書いていただいた、それぞれの変化点について、次の8つの質問をします。 ①その課題は、何をしようと(目的)していた時に生じましたか。 ②その課題を解決するために、何を行いましたか。 ③どのようなきっかけで行いましたか。 ④誰と行いましたか。 ⑤その時、どのようなビジョン(目標)を持って行いましたか。 ⑥その時(課題解決時)どのようなことを大切にしていきましたか。 ⑦課題解決を行う上で、苦労したことはありますか。 ⑧課題解決にあたって、キーパーソンとなった人物を教えてください。
3. これからの黒川温泉について ①現在、黒川温泉にとっての課題や困っていることはありますか。 ②黒川温泉にとって、これからも受け継いでいきたいことを教えてください。 ③黒川温泉にとって、変えた方がいい、変えていきたいことを教えてください。 ④あなたの考える、「黒川温泉らしさ」とはなんですか。

d) 「人生の振り返り曲線」について

すべての調査の始めに、10分ほど時間を取り、「人生の振り返り曲線」(以下、曲線と略す)と題した、グラフを作成して頂いた。図-2に、対象者が作成した振り返り曲線の一例を示す。グラフの縦軸は、インタビュー対象者の人生の満足度や幸福度を示し、横軸は、年齢を示している。

振り返り曲線作成により、対象者自身が、黒川温泉に関わってから、現在に至るまでの振り返りと整理を行うことができる。また、作成された曲線が、インタビューだけでは提示できない、エピソードの「メタ意味」提示の材料にもなりうる。

さらに、それぞれの曲線を重ね合わせたり、比較

することで、同じ出来事に対する捉え方の違い等を考察することが可能となる。

(2) インタビュー調査結果

a) 歴代組合長 4 人への調査結果

4 名の中には、黒川出身で 1 度故郷を離れ帰郷した者、婿養子として 30 代で初めて黒川温泉を訪れた者等がいた。本調査では、主に対象者が、黒川温泉で働きだしてからのエピソードを聞くことができた。図-2 に M 氏が作成した曲線を示す。

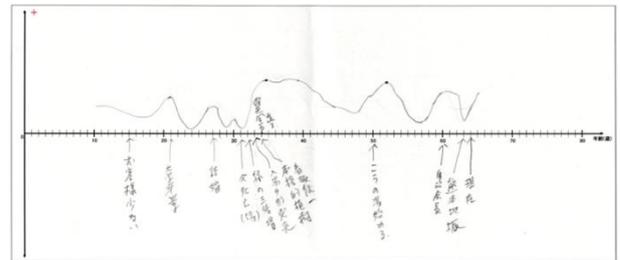


図-2 M氏の「人生の振り返り曲線」

M 氏の振り返り曲線の 1 つ目のピークは、1982 (昭和 60) 年頃であり。インタビューでは当時の自身や黒川温泉内部の人々の意識変化、影響を受けた人物について詳しく話していた。曲線が低くなっている部分は、2003 (平成 15) 年のハンセン病問題や、2016 (平成 28) 年の熊本地震等、黒川温泉にとって負の事項に関わっていることが分かった。

G 氏の曲線では、1993 (平成 5) 年に学生らと意見交換等を行い活路開拓ビジョンをつくった時がピークである。インタビュー中も、他の温泉地への研修や有識者から影響を受けた話等、外部の人との関わりについて、よく話していた。

A 氏は、自身が初めて黒川温泉を認識した時の感情を詳細に話した。婿養子として黒川温泉に来た当初、客の少なさ等から度々「逃げ出したい」と思っていたが、すぐに同世代と打ち解け、共に先輩の技術を真似する等、積極的に営業を行ったという。

S 氏の曲線のピークは 2009 (平成 21) 年で、自身が組合で環境について学んだことを述べた。一方、熊本地震はマイナスに捉えており、インタビューの際には、黒川温泉の現状や、今後の課題についてよく話していた。

b) 元役場職員への調査結果

この調査では、南小国町出身で、以前南小国町役場に勤められており、現在組合の事務局長をされている I 氏に、インタビューを行った。役場勤務時代と、事務局長就任以降での黒川温泉への関わり方の違いや、立場の違いによる、問題意識の違い等を聞くことができた。

I 氏は、印象に残っている出来事に、2003 (平成 15) 年のハンセン病元患者の宿泊拒否問題や、急増した日帰りの外国人団体観光客への対応を挙げた。当時を振り返り、「トラブルは怖い」と話しており、トラブル対処の難しさを述べた。

c) 現組合長への調査結果

この調査では、現在の組合長であるK氏にインタビューを行った。K氏の曲線のピークは、黒川に生まれてから、進学で故郷を離れるまでの間だ。インタビューでは、当時が最も「ふるさと」を感じることができていた、と述べた。K氏は、2015（平成27）年から現在まで、旅館組合長を務められており、帰郷後以降のエピソードに加え、黒川温泉の現状課題についても、聞くことができた。

d) 有識者・元県庁職員への調査結果

I W氏は、1963（昭和 38）年以降、熊本県庁の観光課、景観整備課長等を歴任されており、熊本県の景観づくりに携わってこられた。インタビューの際には、1985（昭和 60）年の、植樹活動開始に至るまでのエピソードを詳しく話しており、外部から見た、活動開始前後における、黒川温泉内部での様々な変化について聞くことができた。

U氏は、1985（昭和 60）年の、くまもと緑の三倍増計画以降、有識者として、黒川温泉の景観づくりに携わってきた。インタビューでは、黒川温泉をより良くする為に、組合員や地域の人達と、重ねてきた「夜なべ談議」について話していた。

また、2名とも、7年～10年前ほどから、黒川温泉の在り方を危惧しており、そのことについても、詳しく話を聞くことができた。

e) 現町役場職員への調査結果

この調査では、1982（昭和 57）年から南小国町役場に勤められており、現在まちづくり課に勤務されているS T氏に、インタビューを行った。S T氏はインタビュー中、黒川の国道に、旅館組合の方々と花を植えたエピソードを述べた。また、曲線中に、駐車場整備、近隣小学校の事を書いていることから、役場職員として温泉街だけでなく、黒川地域全体での出来事が印象に残っていることが分かった。

f) ランドスケープデザイナーへの調査結果

今回、インタビュー調査をするにあたって、インタビュアーとして、2000（平成 12）年から現在に至るまで、黒川温泉の景観づくりに携わっているランドスケープデザイナーのT氏にも加わっていただいた。T氏は、2004（平成 16）年に、組合の50年記念誌を作成しており、当時、歴代の組合長全員と、今まで黒川温泉の観光地形成に携わってきた方々に、インタビューを行っている。今回の調査対象者の選出にもアドバイスをいただいた。

(3) 調査結果のまとめ

インタビューのデータは、全て筆者が文字起こしを行い、分析の一次資料とした。今回の調査では、振り返り曲線が、重要な役割を果たしていることが分かった。例えば、役職や立場、世代等が違っていると、同じ出来事でも、捉え方に違いが見られた。また、2002（平成 14）年に、観光客数がピークに達した事について、M氏の曲線は低い位置（脅威と感じている）にあるが、G氏の曲線は高い位置（好機と感じている）にあり、全く逆の印象を持っていたこと

が分かった。このように、振り返り曲線は、何人かの曲線を重ねて分析したり、比較したりすることで、単に上下の位置関係をみるというよりは、その「変化」に着目してシークエン্স的に分析することで、エピソードの背景にある「メタ意味」を理解することに役立った。

4. 黒川温泉における課題解決手法

(1) 観光まちづくりにおける課題抽出・解決手法

調査をもとに、「対象者の1人が取り上げた課題について、その課題を認識した時期に、黒川温泉に関わっていた者の過半数が、同出来事を課題に感じていた」かどうかを基準に、共通課題の抽出をした。結果、a)～f)の6つの共通課題が抽出できた。本節では、6つの課題と、各課題の解決手法を考察した。

a) 旅館業の模索

M氏、G氏、A氏の3名は、昭和50年代初め頃、客が少なかったことについて述べた。当時は、ゲートボールをする為に訪れる老人会の客しかおらず、それ以外の客は、平日で2、3人程度だったという。

さらに、婿養子として20代で初めて、黒川温泉にきたA氏は、「遠いも遠いですね。（初めて来た時は、）車できたけど、今はバイパスのあつでしょう。前は旧道やったとですよ。田んぼをはさんで来るわけですよ、小国から。時間がかかるかかる。途中で車に酔うたですもん。」と、当時、道が整備されておらず、辿り着くまでに、大変な思いをしたことを語った。

調査の中で、この課題に対して様々な解決手法が明らかになった。1つ目は、1961（昭和36）年の組合発足である。発足時の初代組合長は、M氏の父親であり、インタビュー時に、M氏から、当時の状況を聞くことができた。当時、客はほとんどおらず、資金不足に悩まされていた各旅館の亭主たちは、旅館に投資する資金を得る為に、組合を発足した。発足当初の組合加盟旅館数は、6軒だった。組合の発足により、県から400万円の資金を借りることができ、それを旅館の経営に利用していた。

その他にも、旅館同士のマイクロバス共有や、団体客の大型バス脱輪対策等の解決手法が挙げられた。

b) 人気旅館の偏り

昭和50年代中盤頃、黒川温泉の旅館の中には、露天風呂を手造りしたこと等から、高い人気を集めた旅館が何軒もあった。

すると、新たに、人気旅館の偏りという課題が浮上した。露天風呂の有無により、予約数に大きな差がつくようになった。M氏は「電話のかかってくるんですよ、露天風呂ありますか？って。それで、ないって言うのと、予約が入らんとですよ。いくら料理がいいとかなんとか言ってもですよ。」と述べた。

さらに、M氏は、露天風呂を作るにも、敷地が狭く、造ることができなかつたと話しており、これから、黒川温泉の人たちが、立地的課題の1つである

「狭い」という課題を、感じていたことが分かった。この課題に対しては、挙げた解決手法のひとつに、1986（昭和 61）年の入湯手形の導入がある。入湯手形とは、1枚 1,300 円で購入でき、購入後半年間、1枚で3軒の旅館の露天風呂に入浴することができるというものである。入湯手形の売り上げは、組合内で平等に分配される仕組みになっており、導入により、露天風呂の無い旅館にも入湯手形の利益が、平等に分配されるようになった。当時、組合の中で、2軒が露天風呂を持っていなかった為、考え出された解決手法である。

この他にも、入湯手形の考え方のきっかけになった、研修旅行や、知識・技術の共有等があった。

c) 温泉街のぼらつき

昭和 50 年代の後半になると、露天風呂は徐々に増え、各旅館がさらに、個人個人で積極的に集客を行うようになった。当時、派手な看板や屋根を設えることで、ほかの旅館との差をつける旅館があった。

このように、個人が各々集客の為に努力しているうちに、温泉街全体の統一感の無さが目立つようになっていった。M氏は、宿泊客から「あんたんこの温泉は、喧嘩しよごたっばい」という指摘を受けたことを話していた。他にも、独学での植樹等、当時、各旅館は、様々な工夫で、集客を試みていたが、温泉街全体がまとまっていたとは言い難い。

調査の中で、この課題に対して以下の解決手法が明らかになった。その一つに、黒川温泉が熊本県に、植樹の為に補助金支給の要請をしたことが挙げられる。当時、熊本県では、細川護熙知事がくまもと緑の三倍増計画を提唱していた。その為、組合は、熊本県に補助金の支給を依頼した。結果、3年間に渡り、黒川温泉に、毎年 200 万円の補助金が支給されることとなり、温泉街全体への植樹が開始され、ハード面での統一感が、徐々に生まれ出した。

さらに、個人看板の撤去・共通看板の設置も解決手法である。当時、組合の若者たちは、温泉街の景観を統一させる為、個人看板の撤去や、デザインを統一した共通看板の設置をした。当時、彼らの親世代の者の中には、「うちの営業権ばじゃますととか」と怒り出す者もいたらしいが、構わず焼き払ったと M氏、G氏は笑いながら話した。

また、平成に入った頃から、頻繁に開かれるようになったという「夜なべ談議」も手法の一つである。U氏とIW氏は、当時の事を振り返り、何十回も、会議を重ねたと話していた。そうして会議を重ねるうちに、1993（平成 5）年に落成した風の舎は、今でも組合事務局の役割を果たしている。

d) ブランド力の低下

「平成に入った頃には、露天風呂というものが珍しくないものになってしまった」と、M氏は述べた。その後、2002（平成 14）年には、宿泊客数と入湯手形の売り上げが、今までのピークに達したが、周囲からは、「こんな人気は続いても 10 年」と言われる等、人気の継続を懸念する声が挙がっていたことを、4名の対象者が話した。

U氏は、ここ 10 年くらいで、新しい土産屋や、旅館が増え出したことに関して、「どこにでもある、みんなやっている、今流行りの事をどんだんだんだんやり始めていることで、黒川の匂いが、色が薄れている感じがしますね」と話していた。

このように、入湯手形の売り上げ枚数や宿泊客数的には、絶頂期であったにも関わらず、世間での露天風呂一般化や、田舎風の温泉の増加、温泉街に雰囲気の違いの違う建物の建設等から、将来に不安を覚える人が出てきたことがわかった。

この課題に対する解決手法のひとつとして、「黒川一旅館」というキャッチフレーズが生まれたことが挙げられた。U氏が、黒川温泉の景観づくりに携わるようになった頃から頻繁に行われていた会議の中で、1992（平成 4）年、「黒川一旅館」の基となる「黒川温泉郷一旅館」という言葉が生まれた。これにより、今までの黒川温泉の取り組みや歴史が明確になり、黒川温泉独自の概念が確立された。この頃から、組合に加盟していない肉屋の主人等が会議に参加していたこともわかった。

これら以外にも、学生らとの意見交換の場を創出や、最近では、組合内で活動方針の見直しをして、何かを作り出す時代から、メンテナンスする時代へと変わってきていることを再確認する等、様々な解決策が挙げられた。

e) 風評被害

2003（平成 15）年に、温泉街の近くにあった某ホテルが、ハンセン病元患者の宿泊を拒否する事件が起きた。そのホテルは組合に未加盟だったものの、組合にも風評被害が及び、入湯手形の売り上げが、2003（平成 15）年の 211,900 枚から、翌年 2004 年には、147,380 枚へ約 2/3 に減少した（資料⁸⁾）。

さらに、インタビュー中でも、当時を振り返り、「あの時は堪えた」と、半数以上が課題に挙げた。

また、2016（平成 27）年に起きた熊本地震は、温泉街に物理的に大きなダメージを与えた。ST氏は、「地震が無ければ、（観光客数は）どのくらいに伸びたんだろう。」と、上り調子だった観光客数が、地震によって下がったことを述べた。

この課題に対して、インタビューから得られた直接的な解決手法はなかった。しかし、資料より、ハンセン病元患者宿泊拒否事件の 2003（平成 15 年）から熊本地震発生の前年の 2015（平成 27）年までの、入湯手形の年間売り上げ枚数と宿泊客数推移は、共に徐々に回復していることから、この間にも解決手法があったのではないかと推測した。すると、2002（平成 14）年から 2010（平成 22）年にかけて、街なみ環境整備事業が行われ、これを機に、組合が、多くの主体と協働し出したことが分かった。

この事業により、温泉街内部の坂や、通り、街灯等の改修が行われた。さらに、多目的集合施設として落成した「べっちゃん館」は、公民館として、地域の話し合いや、観光客の休憩場に利用されている。このように、約 8 年の間に、協働主体が増えたことで、温泉街全体が整備され、魅力創出につながった。

f) 連携不足

K氏は、現在抱えている課題として、外部との関わり合いが希薄であることを述べた。また、「観光の人間だけが盛り上がっていて、一般町民の方々だったり、その他の関係者が豊かさを享受してないところっていうのは、絶対廃れるんだろなって思いますよね。」と、観光業だけではなく、地域が一体となっていくことの必要性を重視していた。また、組合事務局長のI氏は、他県と一緒に何かをすることの難しさを感じていると述べた。

この課題に対して、以下の解決手法が明らかになった。1つ目は、組合主体でイベント等を開催する際に、地域住民と一緒に運営するようになったことだ。その結果、地域内で行事を行う際等に、組合の人手不足も、カバーすることができるようになった。

2つ目は、他県と協議会を設立したことである。2016（平成 28）年に、地震を機にやまなみハイウェイ観光連絡協議会が設立された。これには熊本県、と大分県が関わっており、外部との連携がなされている例の一つだ。

(2) 課題抽出・解決手法のまとめ

a)や b)の課題内容は、各旅館が個々人で、それぞれ抱えているものだった。しかし、c), d), e), においては、内容が、温泉街のばらつきや、ブランド力の低下等、温泉街全体が抱える課題へと変わった。さらに、f)の「連携不足」に関しては、地域の外にも目を向けた時に感じる課題である。

以上より、黒川の人々は、課題を認識する際に、各旅館という狭い範囲から、地域全体という広い範囲へ目を向けるようになっていったことが分かった。

次に、解決手法に関するまとめを行う。a)の解決手法としては、組合発足等、黒川で旅館業を営んでいた人々が、必要時に知恵を絞っていった。

b)の課題への解決手法では、a)の時と違い、入湯手形の導入等、他の旅館が抱えている課題に、組合全体で向き合うようになった。

c)の解決手法は、植樹や看板設置、組合事務所の建設等、ハードな取り組みが目立つ。一方で、話し合いの場を重ねる等、ソフトの取り組みも頻繁に行われるようになったことから、意見を形にできるようになっていったと分析できる。

d)に関しては、有識者の介入により、「黒川一旅館」という言葉が生まれる等して、解決に至った。

e)の課題に関しては、協働主体が増え、様々な取り組みが続けられていることで、温泉街の魅力創出につながり、予測不可能な風評被害からの人気回復が可能になったと考える。

f)の課題に関しては、内外部とのつながりを増やしていく為に、組合が積極的に様々な主体と連携を取っていることが代表的な解決手法だと言える。

以上より、黒川温泉では、時代の流れとともに、課題抽出・解決手法の両方が、徐々に視野を広げ、近所同士の解決手法から、外部と連携した解決手法へと発展してきた。

5. 黒川温泉の観光まちづくりにおける協働

(1) 各課題解決における協働の分析

本節では、a)~f)の6つの課題解決における協働には、主体、目的、仕組み、活動、という構造を持つと考え、1節で抽出した課題が、2節で明らかになった解決手法で解決される時に、どのような協働があったのか、それぞれ分析した。

6つの課題のうち代表として、d)課題に関する、共通課題の認識から、解決に至るまでの協働を、図-3に示した。

a) 旅館業の模索

昭和50年代の初め、黒川にある各旅館は、客が来ないことから、暇つぶしに、同世代で集まって遊んでいた。その様に、コミュニケーションをとる中で、「旅館業の模索」という共通課題が認識され、結果、「集客したい」という共通目的が芽生え、必要時には、近所の旅館同士で協力し合っていた。この頃、黒川温泉での協働の在り方としては、各旅館同士の協働であり、協働した主体としては、「旅館」1つである。

b) 人気旅館の偏り

昭和50年代半ば、人気のある旅館のみ、客が来るようになった。当時、各旅館は、「人気旅館の偏り」を、共通の課題として捉えていた。

やがて、各旅館が、「全ての旅館を平等に潤わせたい」という、共通の目的を持つようになり、その結果、入湯手形の導入を始めとする様々な解決手法が、旅館同士の協働で施された。この頃、協働した主体は、「組合」1つである。

c) 温泉街のばらつき

昭和50年代後半、各旅館の派手な集客活動により、組合は温泉街全体のばらつきを指摘される、または、感じるようになる。各旅館は、「温泉街のばらつき」という共通課題を解決する為に、「温泉街に統一感を持たせたい」という共通目的のもと、熊本県や有識者に、協力の要請を始めた。協働の流れは、まず、1986（昭和 61）年に植樹を始める際、組合が、熊本県に補助金支給の要請をした。熊本県は、それを受理し、実際に植樹が始まったが、その確認検査で植樹の方法をダメ出しされた。その後、熊本県が、有識者を紹介し、正しい知識のもと、植樹が再開されるようになった。植樹活動は、有識者が黒川へ介入するきっかけとなり、その後も有識者は、黒川温泉に関わり続け、黒川の景観づくりについて、アドバイスをするようになっていく。この頃、協働していた主体は3つである。

d) ブランド力の低下

平成に入ると、組合の人々は、世間的な露天風呂の浸透、田舎風温泉の増加等から、将来に不安を抱き出した。また、県や有識者も、「地色が薄れてきた」と感じるようになったことから、当時、黒川に関わっていた人々には「ブランド力の低下」という共通課題があったことが分かる。

やがて彼らは、「アイデンティティを確立させたい」という共通目的を持ち、学生や地元住民との、意見交換が活発化した結果、様々な人の意見を取り入れたまちづくりをするようになった。この頃、協働した主体は4つである。

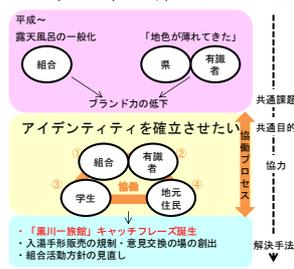


図-3 「ブランド力の低下」への協働

e) 風評被害

対象者の多くが課題に挙げた風評被害は、「ハンセン病元患者の宿泊拒否事件」である。売り上げは減少したにも関わらず、徐々に回復した。調査から、宿泊客数回復の背景には、人々が「温泉街の魅力を向上させたい」という、共通目的を持ち、その達成の為、様々な取り組みを行ったからだと考えられる。

2003（平成 15）年に始まった、街なみ環境整備事業では、役場やコンサルタント会社、一般企業等が参加した。事業導入で、トイレ等公共空間が整備され、公民館である「べっちゃん館」も落成した。さらに、一般企業が自動販売機の色を景観に馴染むようなものに変え、コンサルタント会社は、街灯を従来品より、コストを抑え、景観に馴染むデザインに変えた。これらの細かい部分や景観への配慮は、協働主体が増えたことで可能になった。この頃の協働主体は6つである。

f) 連携不足

この課題解決の為、最近では、「つながりを増やしたい」という共通目的のもと、イベント運営時に、組合員ではない地元住民が、組合員と共に指揮をとったり、イベント準備の際に、ボランティアを募集したりしている。また、2016（平成 28）年に、やまなみハイウェイ観光連絡協議会が設立されたことから、他県と連携し始めたこともわかる。このように、協働主体は、8つに増えた。

g) 各課題解決における協働のまとめ

本項では、a)～f)で分析した各課題解決における協働についてまとめた。a)～f)で分析した結果、今まで黒川温泉が観光まちづくりを行うにあたって、主体が共通課題を認識し、解決の為に目的を共有することで、他主体との協働を可能にし、活動してきたという流れがあったことがわかった。時代により、課題内容や、協働主体数、解決手法は異なるが、この一連の流れによって、諸課題の解決に至ってきた。

共通目的に着目すると、a)や b)の、旅館業に限定された目的から、c)以降から、温泉街全体の目的へ変化した。また、協働の仕組みにおいても、c)から外部の人間が関わり出しており、これにより、目的の範囲が広がっていったことが分かった。

(2) 観光まちづくりにおける協働の変化

本節では、黒川温泉の観光まちづくりにおける変遷を、2節で明らかになった、6つの課題解決の協

働に着目して解明し、時代の流れに沿ってまとめる。

図-4に昭和50年代前半から、現在に至るまでの、黒川温泉での協働主体数の変化と、位置づけの変遷を示す。縦軸が年代、横軸が課題解決時の協働主体数を示している。

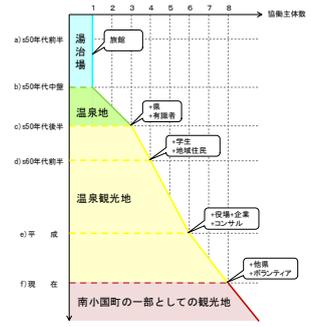


図-4 協働主体数の変化と位置づけの変遷

a) 昭和50年代前半

課題解決を行う協働主体は旅館のみであり、必要時には各旅館が力を合わせ、課題解決していた。遠方からの客は少なく、地元住民の湯治利用が主だったことから、位置づけは、「湯治場」と言える。

b) 昭和50年代半ば

協働主体は組合のみだった。若者達が次々帰郷し、集客の為、様々な努力を始めたことで、人気のある旅館には、温泉目的の客が増え出した。さらに、入湯手形の導入等が話題を呼び、徐々に、黒川の温泉としての知名度が上がり出し、位置づけは「温泉地」へ変わった。

c) 昭和50年代後半

協働主体は3つに増えた。新しい2主体が加わったことで、景観の整備等、「見た目」への配慮がされるようになった。また、「黒川一旅館」というキャッチフレーズが浸透し出したこともあり、各旅館が個々に集客していた時代から、「黒川温泉」という1つのブランドができ、皆で集客する時代へと変化した。また、客は、「黒川にある旅館α」に温泉に入りに行く風潮から、「黒川温泉街」という観光地に観光に行く風潮が増えた。客層についても、地元住民の利用は、減り、遠方から訪れる客や、団体観光客が増えた。これらのことから、黒川温泉の位置づけは、「温泉観光地」へ変わったと分析できる。

d) 昭和60年代前半以降

徐々に協働主体は増え、地元住民や学生が入り、個性を持たせる為のまちづくりが開始されたこと等から、「温泉観光地」という色が以前よりもさらに濃く出てきた。

e) 平成以降・現在

様々な事業導入により、協働主体はさらに増えた。最近では、他県との協働も始まり、地域との連携もより強くなった。地域全体を盛り上げていこうとする取り組みも多々あり、近隣の他観光地との連携を図るようになったこと等から、黒川温泉の位置づけは、「南小国町の一部としての観光地」へ変わってきていることが分かる。

f) まとめ

以上から、黒川温泉では、旅館組合を中心に、様々な主体との協働により、協働自体も、観光地の発展とともに広範囲に進化してきたことが分かった。

6. 研究のまとめ

本研究では、黒川温泉が観光まちづくりを行う上で、各時代が抱えていた6つの課題解決手法、解決における協働について、エピソード記述を用いた調査により、それぞれ明らかにした。

抽出した課題に関しては、時代の流れに沿い、課題内容が、個人のものから温泉街全体の内容へと変化し、近年では、温泉街の外も含めた、南小国町が抱えるものへと広がっていったことが分かった。

課題解決手法に関しては、旅館組合が主体となつて、黒川温泉が置かれた環境（遠い、狭い、急だ）をよく認識しつつ、革新的な指導者や外部の意見をよく聞き入れ、時代とともに、各旅館が個人で解決しようとしていた時代から、様々な主体と力を合わせた、多様な手法へ変化し、「黒川温泉」のブランドを高めてきたことが分かった。

協働に関しては、協働する主体数が徐々に増え、その形態も多様化してきた。また、黒川温泉における協働の変化は、黒川温泉における個々の旅館の観光業の進展から、黒川地域のまちづくりとして発展してきたことと関係している。旅館組合員以外の外部のインタビューは皆、「黒川の人々は、外の人々の言うことを良く聞く」と語った。黒川の人々は、個々の旅館が経営難から脱却し、地域を良くする為に、旅館組合が一体となつて様々な工夫をする中で、外部の意見をしっかりと聞き、それを黒川温泉の置かれた厳しい環境の中で身の丈に応じた範囲で、上手く取り入れることができるようになった。

このように、黒川温泉における協働では、黒川の人々が一貫して外部の意見を取り入れ、様々な分野同士の協働が可能となり、アイデアに多様性が生まれ、多角度から「立地的課題」を独自の魅力に変換していくことができたと考察された。

以上より、黒川温泉の観光まちづくりでは、観光地として様々な課題に直面しながらも、時代の流れに順応しながら変化してきた協働の多様性と、一貫して継続してきた活動理念の2つがあったからこそ、観光まちづくりの発展が可能になったといえる。

謝辞：本研究に関して、貴重なアドバイスを頂いた風景デザイン研究所株式会社STEP代表取締役の徳永哲様に、熱く御礼申し上げます。また、インタビュー調査にご協力下さり、貴重な資料をご提供頂いた黒川温泉観光旅館組合の皆様にも、感謝申し上げます。その他、研究にご協力に頂いた皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 浦達雄：黒川温泉における小規模旅館の経営動向、大阪明浄大学紀要第4号、2004。
- 2) 猪爪範子：湯布院町における観光地形成の過程と展望、造園雑誌55(5)：367-372、1992。
- 3) 片岡由香・出村嘉史・山口敬太・川崎雅史：官民共同の地域づくりにおける市民の自律的役割と活動の継続性に関する研究近江八幡市を事例として、景観・デザイン研究講演集No.6、2010。
- 4) 杉万俊夫：コミュニティのグループ・ダイナミックス、京都大学学術出版会、2006。
- 5) 禿迷廬：小國郷史、pp.478-483、1960。
- 6) 後藤哲也：黒川温泉のドン 後藤哲也の「再生」の法則、朝日新聞社、2005。
- 7) 鯨岡峻：エピソード記述入門実践と質的研究の為に、一般財団法人東京大学出版会、2005。
- 8) 黒川温泉観光旅館協同組合：2017年度視察資料、2017。
- 9) 黒川温泉観光旅館協同組合：黒川温泉観光旅館協同組合設立50周年記念誌、2012。

(2018.7.31 受付)

Study on Collaboration for Sightseeing Community Development in Kurokawa-Onsen

Nodoka MITSUNAGA and Naoto TANAKA

In the Process which from the hot spring resort used by only residents develop as a touristic place visited by a lot of tourist from other areas, "Collaboration" is necessary for various stakeholders share goals and cooperate to solve regional problems. The purpose of this study is to elucidate the collaborative process in sightseeing community development, based on an interview survey at Kurokawa-onsen in Kumamoto Prefecture. It is that several collaborative activities date in sightseeing community development are analyzed from the view point task extraction, solution of method, collaborative process.

As a result, in Kurokawa-onsen, there have been various collaborative processes in solving six task, and through collaboration with various stakeholders, mainly in "Kurokawa Onsen Ryokan Association", it turned out that the collaborative process itself has evolved extensively with the development of tourist place.